

東京のくすんだ空の下を、色のない女が歩む。

乾いた風がぼさぼさの長髪をかき乱し、潤いのない肌をひつかいていく。彼女のいでたちと同様に、その瞳も女性らしい輝きを忘れてしまったかのような、古ぼけた、弱い光を放つのみだった。

醜くはない。

だが、とりたてて魅力というものもない。

鈍色の葉が一枚、宙を舞って彼女の視界を縦断した。風のいたずらか、しばしその行く手を導くようにして飛び進み、やがて地に落ちるとともに女の靴に踏み潰された。

もとより彼女はその葉を見ていなかった。

彼女は、己の行く手にさえ、なんら注意を払っていないようでさえあった。淀みのない足取りは、かえって迷うということを放棄してすらいた。

道行く人々は、そういつた彼女の様子に一切の注意を払わない。すれ違う瞳が、ほんの一瞬彼女の姿をそこに捉えようとも、それはどこにもひつかかることなく、風景に与えられる程度の関心さえ持たれずに通り過ぎていく。

しかしながら、俯瞰する者の眼に依つてすれば、そこには色鮮やかさと輝きが、何もないその女との対比によつて豊かなものとして写し出されているのだった。空にも、建物にも、植物にさえ煌きの失われたこの東京という街で、あらゆる色彩を放棄したその女こそが、すべての存在物を鮮明にするのだ。

本郷通りを行く人々の姿は、皆それぞれに希望を抱いているようだった。初老の紳士や淑女のみならず、学生までもが上質な衣服に身を包み、その身をなんら恥じることなく、行くべき道を進んでいた。

その光景において、飾り気のないウインドブレーカーとチノパンツを纏った姿の女は、乾いた風と共に掻き消えてしまふようだった。

女はただ彷徨っているのだ。

彼女に道を指し示すものは誰もなく、そうしてくれる何かを探すでもなく、無目的に、灰色の天の下を行き、戻るだけの時間を過ごしているのだった。

この東京を放浪するだけの、空っぽの意識。

空虚。——八雲紫は、週に一度だけ生まれる自由な時間を、ただそうやって無為に過ごしていた。

三十路前の女にしては、芯が細く、あたたかさの感じられない身なり。

ひとことでは言え、くたびれていた。

人目に触れず、何も主張せず。しかし、人間としての活動を一切失ってしまっているというわけではない。家庭も職もあり、生きるためにしなければならぬことは数多い。それを放棄してはいない。

しかし、満たされない。

空っぽの身体を抱えて、空っぽの時間を、誰とも出会わずにいることでやりすごしていた。

突き動かす、何者かの気配。

都道を連なつて駆け抜けていく自動車も、それぞれの速度で歩んでいく行人も、それらを頭上から見下ろし、さえざる小鳥たちも。誰も彼もがただ気ままに、何処へ向かうともなく進んでいくわけではない。彼らの背後には往々にして、指差し、どこかへたどり着くことを示唆する何者かの気配があった。そして、紫はその例外ではなかった。ただ、その何者かは、彼女へ特定の目的地を提示しない。どこへでもいいから行ってくれという、ある種の失望のような無言の命令があるのみだった。突き詰めれば、畢竟、その命令を作り出しているのは紫自身の意識、ないしは無意識であった。

逃避。

その言葉に結論付けられる歩み。

紫は時折、己の身体を抱くようにして、片方の手を逆の腕に当てた。細い指には指輪のひとつもなく、代わりに、うっすらと痣が浮かび上がっていた。

ふと、紫の足が道を折れた。

そちらに何かあるというわけでもない。一本入った路地は、いやに曲がりくねっていて、そしてその先は下り坂になっていた。

窮屈な歩道を歩んでいくと、向こう側に人影があった。紫は身を寄せてすれ違う。その時彼女は相手方を一瞥もしなかったが、一方でその人物は紫の方に遠慮がちな視線を送っているようだった。紫はそのことにさえ気づかず、頼りない足取りのまま進んで行ってしまう。

「紫」

背中から声をかけられた。

ともしれば、彼女はそれが自分に向けて発せられた音声であることにすら気づかず、行き過ぎてしまふところだっただろう。

この時紫の足を立ち止まらせたのは、その声が自分の名を呼んでいたためではなく、音そのものに聞き覚えがあったためだ。

一抹の記憶が揺り起こされる。

しかし、それは具体的な形を結ばなかった。紫は過去を葬った女なのだ。

一切の記憶を捨て、名も忘れた遠くの土地から、この東京へとやってきた喪失者であるのだ。

こちらに居ついでからもはや十五年ほどになる。その間、一度としてかつての彼女を知る者と出会うことはなかった。故に、遠い記憶などはやとつくに、跡形も無く捨て去つたものと——思っていた。だが、それはあつけなく。

ある女の声によつて、引き戻された。

そして。

「……侑子」

紫が、その記憶と共に嫌悪感を呼び起こすよりも早く、彼女は相手の名をもつて答えていた。

——何故。

紫の内心が乖離して、己の行動に戸惑う。

気づかぬ振りをして、通り過ぎてしまえばよかったものを。——どうして。

それと認めてしまったのだらう。

紫の瞳が、この時初めて意思を持ったかのように動き出す。相手の姿を認める。

紫の言葉に、その人は顔をほころばせるのを隠しもしなかつた。ずいぶんと、懐かしい笑顔。

さいぎょうじ、ゆうこ。
西行寺、侑子。

大和撫子らしい、丸みを帯びた、それでいて若々しい鋭さも併せ持った美人だった。輝きほとぼしるかのような瞳。まるで紫と同じ年齢とは思えぬものだ——彼女自身自覚せざるを得なかつた。紫は己を恥じた。一瞬遅れてやってきた劣等感は、あたかも津波のような勢いで彼女を襲った。他者と関わらず、故に自我もない時間を過ごしていた紫は、しかし、人格あるかつての知り合いと出会うことで、自分がいかに弱弱しく華のない姿でいるのかを、まるで指差し改められているかのような心持になった。少しの間侑子を見つめたその視線は、紫自身によつて曲げられ、地に落とされる。

もう一瞬経つても、紫が封じた記憶がよみがえつて、奔流となつて彼女を襲うようなことは起こらなかつた。侑子についても、思い出したのはその名と、かつては親しく言葉を交し合うような間柄だった、というような漠然とした印象だけであつた。

木枯らしが一陣、砂埃を携え通り過ぎていく。上着のたなびく音がしている間、紫は先ほど思い浮かんだ以上のいかなる自覚も発しないまま、ただそこに立ちすくんだ。そして、冷酷なまでの沈黙に至つて尚、彼女には如何なる振る舞いをすべきかという考へのひとつも浮かべられず、途切れたままの姿でそこにあつた。それは空虚であり、停滞であり、ある意味で、八雲紫という女のかつてとは違う有様を、侑子に対して過不足無く映し出していた。ほどなくして紫自身そのことに思い当たる。侑子はあざ笑うだらうかと思つた。あるいは失望するかと。それで納得されるならば——それでもよかつた。ただ、紫はこの場から逃げ出してしまひたかつた。